

タビニとゴトニの機能と解釈

言語学・応用言語学専門分野

1LT10119P

久永 知美

2010(平成22)年入学

2014(平成26)年1月提出

要旨

本論文では、「A タビニ B」「A ゴトニ B」という形式において、一見交換可能であるように思われるタビニとゴトニが、交換すると容認性に違いが見られる場合があることに着目し、タビニとゴトニの性質について考察した。タビニは、A に複数回発生するものであるという解釈をもたせ、B にその A の発生と毎回共起するものであるという解釈をもたせる。それに対して、ゴトニには、変化のゴトニと意図のゴトニの2種類がある。変化のゴトニは、B に対し A の発生に伴って段階的に度合いが進展していくものであるという解釈をもたせ、意図のゴトニは、段階性をもたない B に対し意図的・意識的に A の発生と毎回共起させるものであるという解釈をもたせる。これらの性質の違いを踏まえると、タビニとゴトニを交換した場合の容認性の違いをすべて適切に説明することができることを示した。

目次

1. はじめに.....	1
1.1. 問題提起.....	1
1.2. 先行研究.....	2
2. タビニの性質.....	4
3. 変化のゴトニの性質.....	7
4. 意図のゴトニの性質.....	11
5. おわりに.....	14
5.1. まとめ.....	14
5.2. 今後の課題.....	14
参考文献.....	16
謝辞.....	17

1. はじめに

1.1. 問題提起

日本語には、(1)のようにタビニとゴトニを用いる表現がある。

- (1) a. [A 体重をはかる]たびに[B 記録をつける]。
b. [A 体重をはかる]ごとに[B 記録をつける]。
- (2) a. [A パンダの赤ちゃんが生まれる]たびに[B 来場者数も増える]。
b. [A パンダの赤ちゃんが生まれる]ごとに[B 来場者数も増える]。

「[A (動詞述語文)]タビニ/ゴトニ[B (動詞述語文)]」という形式で用いられるタビニとゴトニは、一見交換可能であるように思われる。例えば(1)では、(1a)、(1b)ともに、「体重をはかると記録をつけるということが繰り返し行われている」という同じような解釈が可能である。(2)の場合も同様に、タビニとゴトニを交換しても同じような解釈が可能である。

しかし、タビニとゴトニは常に交換可能であるとは限らない。(3)-(6)のように、タビニとゴトニを交換すると、容認性に違いが見られる場合がある。

- (3) a. ??練習に参加するたびに仲間の輪に溶け込んでいく。
b. 練習に参加するごとに仲間の輪に溶け込んでいく。
- (4) a. #クリスマスが近付くたびに忙しくなる。
b. クリスマスが近付くごとに忙しくなる。

たとえば、(3b)のゴトニは「練習に参加すると仲間の輪にだんだんと溶け込んでいく」というような自然な解釈ができるが、(3a)のタビニは、「練習に参加すると仲間の輪に溶け込み、次参加すると同じく仲間の輪に溶け込み、を繰り返す」というような不自然な解釈になってしまう。また、(4b)のゴトニは「10月、11月、12月とクリスマスが近づくとどんどん忙しくなる」という解釈であるが、(4a)のタビニでは「毎年クリスマスが近付くと例年通り忙しくなる」というような解釈になる。一方、(5)、(6)では、タビニでは容認可能であるが、ゴトニでは容認性が低い。

- (5) a. フェリーに乗るたびに船酔いする。
b. ??フェリーに乗るごとに船酔いする。

- (6) a. 大会の日が近づくたびに緊張感が生じる。
b. ??大会の日が近づくごとに緊張感が生じる。

このように、タビニとゴトニは、一見交換可能なくらい近い意味内容を表すことがあるようにも見えるが、交換すると容認性に違いが見られる場合がある。そこで、本論文で明らかにしたい問題は、一見交換可能に見えるタビニとゴトニを交換したとき容認性に違いが出るのは、タビニとゴトニのどのような性質によるものなのか、ということである。

本論文の構成は次のとおりである。1.2 節では先行研究を挙げる。2 章ではタビニの性質について、3 章、4 章ではゴトニの性質についての本論文の分析を提案し、その分析に基づいて現象を説明する。5 章で、本論文をまとめ、今後の課題を述べる。

1.2. 先行研究

動詞に接続するタビニとゴトニの違いについて両者の機能を比較する分析は、これまでほとんどなされていないが、タビニとゴトニの品詞や意味についてなされてきた指摘を列挙する。

橋本 (1969: 66-71)は、「他の語に或品詞の資格を與へるもので、それによつて、その語が文節を構造する上にその品詞と同じはたらきをなし、或は單獨で或は附属詞をつけて、或はきれ或はつゞく文節を作るやうになる」ものを「準用助詞」と分類しており、さらにそのなかで「副詞の資格を與へるもの」を「準副助詞」とし、その一例に「ごと」を挙げている¹。

奥津 (1986)は、「形式副詞」を「副詞ではあるが非自立的で、補足成分をとって副詞句を成すもの」とし、「たび」「ごとに」は、その中の「頻度の形式副詞」に分類されている。ただし、「木ごとに」「家ごとに」などの場合には頻度の形式副詞から外しておく、としている。

副島 (2007)は「スルタビ(ニ)」を時間的關係を表す副詞節の一つとして挙げている。また、村木 (2007)は、「たび(に)」を従属接続詞の一つとして挙げ、<反復相><強意相>を特徴づけているとしている。

前田 (2009)は、連用節(副詞節・並列節)を構成する「接続辞」を 11 の意味分類に分

¹ タビニ、ゴトニの品詞については、これまでいくつかの研究論文において僅かながらも言及されてきた。森重 (1959)は、「形式副詞」のうち、各個的にその総体を示すものの具体例として、「行くたびに」「見るごと(毎)に」を挙げている。また、益岡・田窪 (1992)は、「形式名詞」のうち主節の表す事態の時を表す副詞節を作るものとして「たび(に)」を挙げている。このように、これまでタビニとゴトニは、様々な品詞の一つとして分類されてきた。本論文では、品詞としては、副詞節を導く点で、タビニ、ゴトニを「形式副詞」とする奥津 (1986)の考えをとる。

け、そのうち時を表すものとして「たびに」「ごとに」を分類している。さらに松木 (2011)は、連用節(副詞節・並列節)を構成する名詞派生の複合辞的表現(名詞性接続成分)を前田 (2009)の分類にあてはめ、同時進行を表すものとして分類し直している。

これらの研究は、タビニとゴトニは言及されているものの、品詞としての議論で扱われることが多く、タビニとゴトニの機能として中心的に議論されているものはない。

2. タビニの性質

タビニにどのような性質があるのかということを考察する上で、まず、(7)の容認性の違いに注目したい。

- (7) a. 子どもが 20 歳を迎えるたびに家族旅行に出かける。
b. ??太郎が 20 歳を迎えるたびに家族旅行に出かける。

(7a)は、子どもが何人かいて、例えば長男、次男、三男がそれぞれ 20 歳を迎えるときに家族旅行に出かけるという解釈で容認可能であるが、(7b)では、太郎が何回も 20 歳を迎え、そしてそのつど家族旅行に出かける、という非常に不自然な解釈になり、容認性が低い。これは、「太郎が 20 歳を迎える」ということは通常何回も起こりうることではないために、容認性が低いということであって、A が複数回起こりうる内容である必要があるということである。つまり、タビニは A が複数回発生しうるものであるという解釈をもたせているということである。

さらに、B が「新しい友達をつくる」である(8a)は容認可能だが、B が「仲間の輪に溶け込んでいく」である(8b)は容認性が低い。

- (8) a. 練習に参加するたびに新しい友達をつくる。
b. ??練習に参加するたびに仲間の輪に溶け込んでいく。

(8a)は「練習に参加すると、毎回新しい友達をつくる」という解釈で容認可能である。それに対して、(8b)の容認性が低いのは、「練習に参加すると、毎回仲間の輪に溶け込んでいく」、つまり、「練習に参加すると仲間の輪に溶け込み、次参加するとまた仲間の輪に同じく溶け込み、を繰り返す」という不自然な解釈が生じているからである。これは、A と B が毎回共起すると不自然な場合に容認性が低いということである。つまり、タビニは A と B が毎回共起するものであるという解釈をもたせているということである。

これらの現象を踏まえると、タビニの性質は、(9)のように考えるのが適切である。

- (9) 「タビニ」は、A に、複数回発生するものであるという解釈をもたせ、B に、その A の発生と毎回共起するものであるという解釈をもたせる。

(9)の提案に従うと、(7)の例は次のように説明される。

- (7) a. 子どもが 20 歳を迎えるたびに家族旅行に出かける。

- b. ??太郎が 20 歳を迎えるたびに家族旅行に出かける。

たとえば、(7a)は、「子どもが 20 歳を迎える」ということは複数回発生しうることで、そのそれぞれと「家族旅行に出かける」が毎回共起して不自然ではないために、容認性が高い。一方、(7b)は、「太郎が 20 歳を迎える」ということが複数回発生しうるのではなく、「家族旅行に出かける」と毎回共起することが不自然であるために、容認性が低い。(10)は、どちらも「5 年経つ」は複数回発生しうる。しかし、(10b)は、「5 年経つ」と「太郎が 20 歳を迎える」ことが毎回共起するのが不自然であるために容認性が低いのである。

- (10) a. 5 年経つたびに子どもが 20 歳を迎える。
b. ??5 年経つたびに太郎が 20 歳を迎える。

さらに、(8)は、(9)の提案で次のように説明される。

- (8) a. 練習に参加するたびに新しい友達をつくる。
b. ??練習に参加するたびに仲間の輪に溶け込んでいく。

(8)では、「練習に参加する」は、複数回発生しうることであるが、(8a)の「新しい友達ができる」は毎回共起可能であるのに対して、(8b)の「仲間の輪に溶け込んでいく」は、毎回共起すると不自然な解釈を生んでしまうので、(8b)は容認性が低くなる。

以下、(11)は、A が複数回発生しうるものであり、A と B が毎回共起可能であるため、容認可能である。

- (11) a. 散歩に出かけるたびにあの犬と出くわす。
b. バスに乗るたびに寝過ごしてしまう。
c. あの事件を思い出すたびに胸が痛む。
d. 母親が微笑むたびに赤ちゃんも笑う。
e. 洗濯をするたびに雨に降られる。
f. 夜中に目が覚めるたびに眠れなくなる。
g. 帰りが遅くなるたびに親から叱られる。

また、(12)-(14)は、容認性が低い。特に、B の動詞そのものが段階的に進展していく意味をもつ場合や、「～てくる」形、「～ていく」形の場合には、A の発生と毎回 B が共起するのではなく、A の発生に伴って進展していく意味を表すため、容認性が低くなる。

(12) Bの動詞そのものが段階的に進展していく意味をもつ例

- a. ??一口食べるたびにおなかが限界に近づく。
- b. ??大会の日が近づくたびに緊張感が高まる。

(13) Bが「～てくる」形の例

??坂を下っていくたびに視界が開けてくる。

(14) Bが「～ていく」形の例

- a. ??雨が降るたびに暖かくなっていく。
- b. ?巨大風船が膨らむたびに周りの人が風船から遠ざかっていく。
- c. ?近所で悪い噂が広まるたびに肩身が狭くなっていく。

このように、「A タビニ B」という形式におけるタビニは、AとBが毎回共起する解釈をもたせるという性質がある。

3. 変化のゴトニの性質

ゴトニの性質を考察する上でも、まずAのデキゴトの複数回性に注目したい。(15a)は容認可能だが、(15b)は容認性が低い。

- (15) a. 太郎は失敗を経験するごとに成長していく。
- b. ??太郎は20歳を迎えるごとに成長していく。

(15a)のように、複数回起こりうる「太郎が失敗を経験する」がAであると容認可能であるが、(15b)のように、通常1回しか起こりえない「太郎が20歳を迎える」がAであると容認性が低い。つまり、ゴトニも、タビニと同様、Aが複数回発生しうるものである必要がある。

さらに、Bが「高まる」である(16a)は容認可能だが、Bが「生じる」である(16b)は容認性が低い。

- (16) a. 大会の日が近づくごとに緊張感が高まる。
- b. ??大会の日が近づくごとに緊張感が生じる。(=(6b))

(16a)は、「大会の日が近づく」と毎回少しずつ（だんだんと）緊張感が高まる」という解釈で容認可能であるが、(16b)は、「大会の日が近づく」と毎回少しずつ（だんだんと）緊張感が生じる」という不自然な解釈になってしまう。これは、Bが段階的に進展していく解釈ができないために(16b)が不自然な解釈になるということである。つまり、ゴトニは、Bが、Aの発生に伴って段階的に度合いが進展していくものである必要があるということである。本論文では、このように、段階的に度合いが進展することが可能な要素をBに必要とするゴトニを、変化のゴトニと呼ぶこととする。

これらの現象を踏まえると、変化のゴトニの性質は、(17)のように考える必要がある。

- (17) 「変化のゴトニ」は、Aに、複数回発生するものであるという解釈をもたせ、段階性をもつBに、Aの発生に伴って段階的に度合いが進展していくものであるという解釈をもたせる。

この提案に従うと、(16)の例は次のように説明される。

- (16) a. 大会の日が近づくごとに緊張感が高まる。
- b. ??大会の日が近づくごとに緊張感が生じる。(=(6b))

(16)では、変化のゴトニが「大会の日が近づく」に、複数回発生するものであるという解釈をもたせ、(16a)では「緊張感が高まる」に、「大会の日が近づく」ことの発生に伴って段階的に度合いが進展していくものであるという解釈をもたせる。しかし、(16b)では「大会の日が近づく」ことの発生に伴って「緊張感が生じる」が段階的に度合いが進展していくという解釈は不自然であるために(16b)は容認性が低くなる。

以下(18)-(22)は、容認可能な例である。

(18) Bの動詞そのものが段階的に進展していく意味をもつ例

- a. 一口食べるごとにおなかが限界に近づく。
- b. 改良を重ねるごとに性能が上がる。

(19) Bが「～化する」形の例

- a. 高齢者の数が増えるごとにバリアフリーの取組が活発化する。
- b. 日本が高齢化するごとに経済が弱体化する。

(20) Bが「～ていく」形の例

- a. レベルアップするごとにキャラクターが強くなっていく。
- b. 洗濯するごとにしみが薄くなっていく。
- c. 雨が降るごとに暖かくなっていく。
- d. 近所で悪い噂が広まるごとに肩身が狭くなっていく。
- e. ダイエットをするごとにやつれていく。
- f. 室内の気温が上がるごとに氷が溶けていく。
- g. 練習に参加するごとに新しいチームに馴染んでいく。

(21) Bが「～くなる」形の例

- a. 温度が上がるごとに温度計の色が赤くなる。
- b. 日が沈むごとに暗くなる。
- c. 画面の下に向かっていくごとに画面が明るくなる。

(22) Bが「～てくる」形の例

- a. 坂を下っていくごとに視界が開けてくる。
- b. 練習を重ねるごとにだんだんとみんなの息が合ってくる。

また、(23)のように、Bが段階的に進展していく意味をもたない場合、容認性が低くなる。

- (23) a. ??一口食べるごとにおなかが限界になる。
b. ??練習に参加するごとに新しいチームに馴染む。
c. ??坂を下っていくごとに視界が開ける。
d. ??練習を重ねるごとにみんなの息が合う。
e. ??作業人員が増えるごとに片付けが終わる。
f. ??ダイエットをするごとにやつれる。
g. ??室内の温度が上がるごとに氷が溶ける。

2章でタビニの性質を、3章でゴトニの性質を述べてきた。

(9) 「タビニ」は、Aに、複数回発生するものであるという解釈をもたせ、Bに、そのAの発生と毎回共起するものであるという解釈をもたせる。

(17) 「変化のゴトニ」は、Aに、複数回発生するものであるという解釈をもたせ、段階性をもつBに、Aの発生に伴って段階的に度合いが進展していくものであるという解釈をもたせる。

本論文で述べたタビニとゴトニの性質を踏まえると、1章で挙げた(2)、(3)のような容認性の違いを説明することができる。(2)はどちらも容認可能で、タビニとゴトニが交換可能であるようにも見える例である。

- (2) a. パンダの赤ちゃんが生まれるたびに来場者数も増える。
b. パンダの赤ちゃんが生まれるごとに来場者数も増える。

(9)と(17)を比較すると、タビニと変化のゴトニの性質の違いは、Bに対して、Aと毎回共起するという解釈をもたせるか、Aの発生に伴って段階的に度合いが進展していく解釈をもたせるかという点である。(2a)では、「パンダの赤ちゃんが生まれる」と「来場者数も増える」が毎回共起することになり、(2b)では、「パンダの赤ちゃんが生まれる」ことが起きると「来場者数も増える」の結果状態が積み重なって進展していくことになり、どちらも容認される。(2a)で起きたことも、(2b)で起きたことも、最終的には同じ結果をもたらすので、(2)の場合にはタビニとゴトニが交換可能な例である。

(3)は、タビニとゴトニが交換不可能な例である。

- (3) a. ??練習に参加するたびに仲間の輪に溶け込んでいく。

- b. 練習に参加するごとに仲間の輪に溶け込んでいく。

(3b)では、「練習に参加する」の発生に伴って「仲間の輪に溶け込んでいく」度合いが進展していくことが可能だが、(3a)は、「練習に参加する」と「仲間の輪に溶け込んでいく」が毎回共起するという解釈をもたせると不自然になってしまうので、タビニとゴトニが交換不可能なのである。

ただし、タビニとゴトニは交換することができない(24)のような場合がある。

- (24) a. *日を追うたびに病状がよくなっていった。
b. 日を追うごとに病状がよくなっていった。

(24)はタビニとゴトニの性質の違いによるものではなく、「日を追うごとに」という表現が慣用句的であるためにタビニでは容認性が低くなっていると考えられる。以下(25)も同様である。

- (25) a. 月日が経つごとに昔の記憶が薄れていく。
b. 回を重ねるごとに上達する。
c. 時を重ねるごとに風味が増す。
d. 年齢を重ねるごとにきれいになる。
e. 彼は事あるごとに私を頼ってくる。
f. 太郎は事あるごとに過去の栄光を自慢する。

このように、「A ゴトニ B」の形式における変化のゴトニは、A の発生に伴って B の度合いが段階的に進展していく解釈をもたせるという性質がある。

4. 意図のゴトニの性質

3章では、変化のゴトニが、「B に、A の発生に伴って段階的に度合いが進展していく」という解釈をもたせる性質があることを指摘した。しかし、この分析では1章で示した(1b)のような例を説明することができない。

- (1b) 体重をはかるごとに記録をつける。

(1b)では、「記録をつける」はデキゴトの結果を述べているだけで段階的に度合いが進展しているわけではない。そのため、変化のゴトニの分析では説明することができない。しかし、ここで注目したいのは、このようなゴトニは、(26)の場合に、容認性が低くなるということである。

- (26) ??体重をはかるごとにショックを受ける。

(1b)は「記録をつける」という意図的に行われる行為であるのに対して、(26)は「ショックを受ける」という意図的に行われない行為であるという点である。これは、(1b)と(26)の容認性の差は、B の行為に意図性があるかないかの違いによるものであるということである。ということは、B の行為に意図性が必要なゴトニがあるということである。B の行為に意図性が必要なゴトニを、変化のゴトニと区別し、意図のゴトニと呼ぶことにする。このように考えると、ゴトニには変化のゴトニと意図のゴトニの2種類のゴトニがある。

ただし、意図のゴトニにおいても、A は複数回発生しうるものである必要がある。(27a)は容認可能だが、(27b)は容認性が低い。

- (27) a. 子どもが20歳を迎えるごとに家族旅行に出かける。
b. ??太郎が20歳を迎えるごとに家族旅行に出かける。

つまり、意図のゴトニの性質は、(28)のように考える必要がある。

- (28) 「意図のゴトニ」は、A に、複数回発生するものであるという解釈をもたせ、段階性をもたないB に、意図的・意識的にそのA の発生と毎回共起させるものであるという解釈をもたせる。

この提案に従うと、(29)の例は次のように説明される。

- (29) a. 体重をはかるごとに記録をつける。(=(1b))
b. ??体重をはかるごとにショックを受ける。(=(26))

(29a)は、意図のゴトニが「体重をはかる」に複数回発生するものであるという解釈をもたせることができ、「記録をつける」が意図性を含む行為で「体重をはかる」と毎回共起させるものであるので容認される。一方、(29b)は、「体重をはかる」は複数回発生しうが、「ショックを受ける」は意図性を含まないので容認性が低くなる。

(30)は、B に意図性があり、容認可能になる例である。

- (30) a. 10 ポイントためるごとに賞品と交換する。
b. 100 日経過するごとに検査を行う。
c. 本を1冊読み終わるごとに感想を書く。
d. NG ワードを言うごとに5ポイント減点する。
e. 注文が入るごとに料理を作る。
f. 1000 円分買うごとに抽選券1枚がもらう。
g. 季節が変わるごとに店内のディスプレイを変える。
h. 1つ単元が終わるごとにテストをする。

一方、(31)のように、B が段階的に度合いが進展しうる要素ではなく、意図性がない場合、容認性が低くなる。

- (31) a. ??散歩に出かけるごとにあの犬と出くわす。
b. ??バスに乗るごとに寝過ごしてしまう。
c. ??あの事件を思い出すごとに胸が痛む。
d. ??洗濯をするごとに雨に降られる。
e. ??帰りが遅くなるごとに親から叱られる。
f. ??夜中に目が覚めるごとに眠れなくなる。
g. ??飲み会に参加するごとに途中で記憶がなくなる。
h. ??朝早くにこの道路を通るごとに渋滞に巻き込まれる。

本章で述べてきた意図のゴトニの性質に基づくと、1章の(1)、(6)の容認性の違いも説明することができる。タビニと意図のゴトニを比べると、その性質の違いはB に意図性を要求するかどうかという点である。

- (9) 「タビニ」は、A に、複数回発生するものであるという解釈をもたせ、B に、その

A の発生と毎回共起するものであるという解釈をもたせる。

- (28) 「意図のゴトニ」は、A に、複数回発生するものであるという解釈をもたせ、段階性を持たないB に、意図的・意識的にそのA の発生と毎回共起させるものであるという解釈をもたせる。

たとえば、(1)の「記録をつける」は、「体重をはかる」と毎回共起可能で、意図性のある行為なので、(1a)も(1b)も容認可能である。

- (1) a. 体重をはかるたびに記録をつける。
b. 体重をはかるごとに記録をつける。

一方、(6)の「緊張感が生じる」には、意図性がない。

- (6) a. 大会の日が近付くたびに緊張感が生じる。
b. ??大会の日が近付くごとに緊張感が生じる。

「大会の日が近付く」と「緊張感が生じる」は毎回共起しても自然な解釈になるため、タビニの(6a)は容認される。しかし、B が意図性を持つものでなければならぬゴトニは、(6b)のように容認されない。

本章で指摘したように、ゴトニには変化のゴトニと意図のゴトニがあると考えると、ゴトニ、ひいては、タビニの言語現象を捉えることができる。

5. おわりに

5.1. まとめ

本論文では、「A タビニ B」「A ゴトニ B」の形式において、タビニとゴトニを交換すると容認性に違いが見られるのは、タビニとゴトニのどのような性質によるものなのかという問題について論じた。この問題に対し、本論文では、まずタビニの性質について(9)を提案した。

- (9) 「タビニ」は、A に、複数回発生するものであるという解釈をもたせ、B に、その A の発生と毎回共起するものであるという解釈をもたせる。

そして、ゴトニの性質については、ゴトニが変化のゴトニと意図のゴトニの 2 種類あることを示し、それぞれの性質について(17)、(28)を提案した。

- (17) 「変化のゴトニ」は、A に、複数回発生するものであるという解釈をもたせ、段階性をもつ B に、A の発生に伴って段階的に度合いが進展していくものであるという解釈をもたせる。

- (28) 「意図のゴトニ」は、A に、複数回発生するものであるという解釈をもたせ、段階性をもたない B に、意図的・意識的にその A の発生と毎回共起させるものであるという解釈をもたせる。

本論文は、タビニや変化のゴトニ、意図のゴトニは、それぞれ B に対して与える解釈が異なっており、これらの性質の違いが、タビニとゴトニを交換した場合の容認性の違いを生み出していることを明らかにした。

5.2. 今後の課題

「A タビニ B」と「A ゴトニ B」という形式において、A と B が動詞述語文である場合を分析してきたが、タビニとゴトニは A が名詞である場合もある。たとえば、(32)は、ゴトニは名詞接続でも容認可能であるのに対し、タビニは名詞を接続させると容認不可能である。一方、タビニ／ゴトニの前に「の」を入れて名詞接続させると、タビニは容認可能だが、ゴトニは「～のごとに」となり容認不可能である。

- (32) a. *10 ポイントたびに賞品がもらえる。
b. 10 ポイントごとに賞品がもらえる。

- (33) a. 100 円分購入のたびにポイントがつく。
b. *100 円分購入のごとにポイントがつく。

また、タビ、ゴトの場合、「～タビ」は意味もそのままで容認可能であるが、「～ゴト」は容認不可能である。

- (34) a. 季節が変わるたびに部屋の模様替えをする。
b. 季節が変わるごとに部屋の模様替えをする。

- (35) a. 季節が変わるたび、部屋の模様替えをする。
b. *季節が変わるごと、部屋の模様替えをする。

このように、タビニとゴトニにはいくつかの形態的な違いが見られる。今後、形態的・通時的観点絡め、これらの違いについて研究を進めていく必要がある。

参考文献

- 橋本進吉 (1969)『助詞・助動詞の研究』東京：岩波書店.
- 前田直子 (2009)『日本語の複文-条件文と原因・理由文の記述的研究-』東京：くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992)『基礎日本語文法-改訂版-』東京：くろしお出版.
- 松木正恵 (2011)「接続関係を表示する複合辞的表現-名詞性接続成分のタイプから見た連体複文構文と連用複文構文の接点-」「複文構文の意味の研究」ワークショップ発表資料,国立国語研究所.
- 森重敏 (1959)『日本文法通論』東京：風間書房.
- 村木新次郎 (2007)「現代日本語における〈とき〉をあらわす従属句・従属節の構造」中日理論言語学研究会第10回研究会 大阪.
- 奥津敬一郎 (1986)「形式副詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』29-104.東京：凡人社.
- 副島健作 (2007)「副詞節の階層性について」『言語文化研究紀要：Scripsimus』16：53-70.

謝辞

本論文の作成にあたり、担当教員の上山あゆみ先生には、ご多忙の中大変丁寧なご指導を頂きました。この場を借りて深く感謝申し上げます。また、九州大学文学部言語学研究室の東寺祐亮氏、市原佳子氏には、卒業論文のテーマが決定してから完成に至るまで、大変貴重なアドバイスや励ましのお言葉を数多く頂きました。心より感謝申し上げます。他にも、九州大学文学部言語学研究室の皆さまをはじめ、たくさんの方に支えられ、本論文を完成させることができました。本当にありがとうございました。